

ジャウィを学ぶ —ジャウィ文献講読講習会実施報告—

坪井祐司

「ジャウィ文献と社会」研究会では、2009年より一般に参加者を公募する形でジャウィ文献講読講習会を年1回開催している。今年の講習会は、10月15日(土)、16日(日)の2日間、東京外国語大学にて開催した。講習会は、京都大学地域研究統合情報センター(共同研究「脱植民地化期の東南アジアにおけるムスリム社会の動態」)、JAMS、地域研究コンソーシアムとの共催にて行われた。

ジャウィとは、アラビア文字表記のマレー語である。ジャウィはマレー語がローマ字化される以前に普及していた表記法であり、主に第二次世界大戦以前の歴史史料にはジャウィで書かれたものが多い。くわえて、現在でも一部のムスリムの間では使用されており、マレーシアにおいては街角の看板や出版物のなかで目にすることができる。ジャウィを読むには、マレー語の知識に加えて、アラビア文字および母音の省略などの綴りの法則性を理解する必要がある。本会はその方法論を習得する機会を提供するために企画された。

今年で3回目となる講習会では、いくつかの点で新たな試みがなされた。その第一は、東京外国語大学のファリダ・モハメド先生の全面的な協力を得て、同大学にて開催したことである。この結果、同大学のマレーシア語専攻の学生を中心に、過去最高の21名の参加者を得ることができた。この場を借りて、会場を提供していただいた東京外国語大学およびファリダ先生に感謝の意を表したい。

もう一つは、講習会に向けてジャウィの教科

書を編集したことである¹。これは、今回の講習用のテキスト(ジャウィの読み方および講読テキスト)にくわえて、近代におけるジャウィの定期刊行物(ジャウィ・プラナカン、アル・イマムなど)の実物を掲載し、その解説を行った「さまざまなジャウィ文献」や、研究会メンバーが各自の専門分野におけるジャウィ資料を紹介・解説した「資料編」からなっている。

講習会の冒頭では、ファリダ先生に講演をお願いした。講演はマレー語で行われ、マレーシアにおけるジャウィの重要性について、実際にマレーシアで発行された書籍や新聞等を使用しながらユーモアたっぷりに熱く語っていただいた。



ジャウィについて講演するファリダ先生

講習の講師を務めたのは、山本博之、西芳実、國谷徹、光成歩(初日のみ)、筆者の5名であった。講習は、初級と中級に分けて行った。当初

¹ 坪井祐司、山本博之編、ファリダ・モハメド協力『ジャウィを学ぶ(CIAS Discussion Paper No.21)』(2011年、京都大学地域研究統合情報センター)。

は最初にテストを行ってクラスを分ける予定であったが、圧倒的に初級の受講希望者が多かったため、テスト結果にかかわらず希望通りにクラスを分けることとした。このため、中級の2人を除く残りの参加者はすべて初級を受講した。初級では、初日にジャウイの読み方の解説を行った。2日目はクラスをさらに分割し、参加者の習熟度にあわせて1日目の補足や簡単な文章の講読を行った。中級は、写真の紹介記事、英単語の多い記事など、さまざまなジャウイのテキスト4編を講読した。最後に初級・中級ごとにテストを行い、優秀者を表彰して講習会は終了した。今回の講習会の反省点は、クラス分けが偏ってしまったことと、時間が不足したためにテキストを十分に消化しきれなかったことである。今後は、クラス設定、時間割などのプログラムとテキストを受講者のニーズに合わせて改訂していく必要があると感じた。

今回の講習会であらためて感じたのは参加者の意欲の高さである。参加者のなかにはマレーシア語を始めて半年の1年生も多数みられ、言語、さらには文化の一部としてのジャウイへの



講習会テキスト

関心の高さを感じさせた。しかし、日本ではジャウイを学べる機会は極めて限られているのが現状である。本研究会では、日本で唯一のマレーシア語専攻を持ち、ジャウイもカリキュラムに組み込んでいる東京外国語大学との連携を深め、ジャウイの講習会を定期的で開催していきたい。それとともに、今回の講習をふまえて、編集したテキストのさらなる充実を図り、受講者のジャウイに対する関心に応えていきたいと考える。



二日間にわたる講習会には約20人の受講者が参加した